

会員の広場



正岡子規「病床六尺」に倣う一ヶ月

—そして—

夏目敏夫（東京）

標題は、子規の隨筆で「獺祭書店主人」と号し、「獺祭」の魚ならぬ藏書を病床に並べた事に由来する。私は昨年六月、緊急入院した、病状は蜂窩織炎、ピロリン酸カルシウム結晶性関節炎の複合だった。上、下肢が腫れ上がり、激痛が走った。数日で通常に回復

壁に青きドアの家並みと、ハンニバルの遺構を思い出し、誌面からシリア人は、アルファベットを作ったフェニキア人の末裔と知る。子規は、妹、律の介護の下、隨筆を編み、俳句を詠んだ。私の入院先は内科、整形に加え、介護・末期医療を専門としていた。同室の患者は高次脳機能障害であることを知った。毎夜、大声で叫ぶ、吸痰器の轟音が、寝込みを襲って来た。患者は上向きで口は空けたまま液状栄養補給、生命維持装置に囲まれ、何んとも表現出来ない姿である。日に何回も、下の物、着替えをナース、介護士がチームで、優しく患者に声をかけながら看護をしていた。介護医療は慎重な心遣いそして大変な力仕事と感じた。世は超高齢化社会、少子化社会を

したが後遺症に悩まされ、リハビリを行い、一ヶ月で退院した。その間、子規に倣い身近に愛書を陳らべた。折しも世間は集団的自衛権論争の渦中でマスコミは情報源だが、言論を含め、研鑽不足で不毛の応酬には失望した。そこで気楽に行こうと、池波正太郎著「鬼平犯科帳」全巻を再読することにした。江戸古地図で現在と照らし市井の「旨き物」を書き留めて見た。江戸巷間の味を吟味していた彼は、機内誌にフランスの田舎の味を連載した食通であった。味三昧の後は「ナショナル・ジオグラフィック」を見た。世界の地理、歴史、文化を紹介する雑誌である。シリア難民の背景・ローマ時代のカルタゴは今のチュニジア、リビア、でクルーズで寄った国々、白

懸念される一方、政府は10年後も1億人を維持する、更に1億総活躍時代と標榜している。厚労省は同時点で労働人口は800万人減、6362万人と推定している。高齢化、少子化社会は介護社会である。国家、経済社会を維持する中で介護分野に労働力をどう配分し、介護社会を継続出来るかである。そして非生産的かつ荷重的労働分野であり、多数の有能な看護、介護士を不可欠とする。この補助は、筋力補完装置、ロボット化、人的には外国人の支援も必要となる。現政権は何本目の矢にこれ等を真剣に考えるのか、お題目では解決出来ない実態を認識しているか、私は喫緊の課題であると、介護、終末医療の現場をみて痛切に感じた。